

イタリア各地を力自慢の大道芸人として巡業するザンバノは、彼の助手ローザの死を知らせに海辺の寒村で貧困に喘ぐ母親の元にやつてくる。母親は嘆き悲しむが、ローザの替わりに妹のジエルソミーナを一万リラで売り渡す。小柄で純粹無垢なジエルソミーナは粗野な大男のザンバノに道化の芸を手荒に仕込まれる。昼は道化、夜はザンバノの幌付き三輪車の狭い寝ぐらで枕と共にする内に、いつしかザンバノに愛着を

ムービー・エッセイ

これだけは見逃せない邦画・洋画セレクション

渕辺 俊一



感じ始める。一方、ザンバノは本能のおもむくまま飲んだくれ、暴れ、行きずりの女としき込んでジエルソミーナの心を踏みにじる。ローザの時もこうだったのかと不安がよぎる。その後、サーカスのテント小屋でザンバノを昔から知っていると言う風変わりな綱渡り芸人、人呼んで「キ印」との出会いは傷心のジエルソミーナを勇気づける。「私はこの世で何をすればいいの」と嘆くジェルソミーナに彼は言う。「ザン

バノは本当にお前を好きかも知れないよ、彼は犬なんだ、お前に話しかけたいのに吠えてしまう」そして「本で読んだのが、この世にあるものは何でも何かの役に立つんだって。例えば、この小石だけてな」という言葉に一転。目を輝かし、小石を握りしめて、「私がいないと彼は独りぼつちよ」とつぶやくジエルソミーナ。ある夜、宿を借りた修道院の納屋で、ザンバノに自分をどう思っているのか聞き出そうとするシンは不憫で胸が詰まる。「何故、私と一緒になの?」「おかしな事を言う女だ」「私が死んだら悲しい?」「…」「少しは私のことを好き?」返事をしないザンバノに、「あなたが居るところが私の家よ」とまで言つて、「キ印」が教えた、も愛用のトランペットで静かに奏でようとする

と、途端に「うるせえ!」とザンバノの罵声が飛ぶ。しかもその直後、あろう事か、彼は罰当たりにも親身になってくれた修道院の銀のクリスト像を、泣いて嫌がるジエルソミーナに盗ませるのだった。この辺から、物語は映画史に燐然と輝く。あの不朽の名場面へと展開を早めていく。そのラストシーンで年老いたザンバノが恐らく生まれて初めて見せた、あの究極の姿には、年を経てみる毎に、哀れさが

くせぬ道への想いの因るところは、そのテーマの宗教的とも言うべき優れた普遍性にあるのだと思う。つまり、ザンバノとジエルソミーナに託して、実は私達のことが描いてあるのだ。しかし、道という映画の本当の見所は、野辺の花の様に、どこにも手抜きのない珠玉の細部にある。特に別れのシーンは圧巻だ。海辺の故郷を後にする時の別離の悲しさと希望の入り交じった顔。ザンバノとの「道」を選び、優しかった『キ印』と別れる際の愛しさと哀しさを湛えた伏し目がちな視線。そして、銀のクリスト像が盗まれたことも知らずに別れを惜しむ清純な修道女に見せる感謝と消え入りそうな懺悔の表情は、そのどれもが一遍の詩であり、上質の絵画を見る思いがする。また、起きあがりこぼしの様に、辛いことには出会つてもすぐ立ち直る、不屈なほどに天真爛漫なジエルソミーナの明るい心が、報われることのない愛ゆえに、少しづつ壊れていく様も、この別れ際の表情の微妙な変化に見事に表現されている。人は一度に死ぬのではない少しずつ死んでいくのだという想いが胸を突く。この映画は1954年制作のイタリア映画。監督・脚本フェデリコ・フェリーニ。音楽ニーノ・ロータ。ザンバノ役にアンソニー・クイン。ジエルソミーナ役にジュリエッタ・マシーニ。彼女は1943年にフェリーニと結婚し、1994年にフェリーニが死ぬと、追うよう五ヶ月後に他界した。全編を流れる「ジエルソミーナのテーマ」の哀愁を帯びたメロディーは甘く切なく、この映画の神格化に大きく貢献している。

大好きな家族で
和氣あいあい♪
大好きな仲間と
和氣あいあい♪
みんなで楽しく
和氣あいあい♪

（飲酒運転 絶対禁止!!）

居酒屋
和氣あいあい



小禄店 ☎ 098-857-8118
国場店 ☎ 098-831-8067

● 営業時間 PM5:00 ~ AM1:00